

続続 都市の色（雑の巻）

佐藤 正

深田研ニュース79号（2005年7月）と81号（2005年11月）に「都市の色」というエッセイを書きました。どんな都市でもそれぞれ固有の色調があって、そういう色調があとあとまで強い印象として残るといった話です。赤を基本的な色調にしている都市としてフランス東部のストラスブールや、タイの古いスコタイの町などを例にひいて、そのもとが建物に使われている石材の色にあるということを書きました。続いて白を基調とする町として筆者がよく知っているパリをあげました。ここでは町が出来はじめたころは石材を建物のすぐそばから切り出していたのが、町の発展に伴って町から離れたところに求めるようになったこと、そのため町の中でも場所によって少しずつ色が違うこと、それでも多くの石材はパリをとりまく地域の第三紀の石灰岩からとられているので、全体として灰色がかった白い町に感じられるというようなことを書きました。色の感じ方は見る人によってそれぞれ違うでしょうから一般化はできないでしょうが、少なくとも私にはそう見えるというつもりで書いたものです。

よく人々が使う旅行案内書（日本のものだけでなく、外国のもの、たとえばフランスのギド・ブルーのようなものでも）には主に名所旧跡が取り上げられていて、ときどきそれが過剰で、まるでどんな町もそういうものしか見るものがないような感じにさせられるのですが、それ以外にも興味のあるものはいっぱいあって、その中には自然科学的なものもたくさん含まれています。たとえば地質的な見方などは書く方が知らないせいでしょうが、ほとんど取り上げられているのを見たことがありませんし、概して自然現象などはないがしろにされているのが通例です。私はいつもそれを不満に思っているのです。つい別の見方もあるよといたくなるのです。たとえばパリの日本語の案内書には、近代科学のゆりかごになった自然史博物館などは無視されています。フランスといえば文芸・美術の国というイメージだけで語られますが、そうなったもとには強大な軍事力でヨーロッパを席捲したという歴史があります。さらにそのもとはすぐれた科学と技術があったからなのですが、そういうことはほとんどふれられていません。書く人、編集する人が文科系に偏っているのです、やむをえないといえばやむをえませんが、あまり見方が偏ってしまうのは褒められたことではありません。

ところで、こういう雑文を読んでもくださる方が思いもかけぬところにおられて、感想を聞かせてくださいました。同時に筆者の思い違いを指摘してくださったのでご紹介し、訂正します。感想をお寄せくださったのは新潟大学災害復興科学センターの丸井英明教授です。丸井先生は最近ヨーロッパに出かけられるチャンスがあって、ハイデルベルクとストラスブールを続けて訪問されたそうです。その折り拙文のコピーを片手に見物されたそうで、赤い砂岩がドイツ三疊紀由来であることなどを教えられたという意味のお手紙でした。その中で、私が思い違いをしていて間違った説明をしている部分を指摘してくださいました。それは、赤の巻の中でストラスブールの大聖堂だといって出した写真（赤の巻の写真3）が、大聖堂ではなくて聖ポール教会であることです。なんとも恥ずかしい話です

が実際その通りで、ストラスブールのホームページで見ますと、橋の向こうに教会が見えるのはたしかにこの教会です。丸井先生からはご丁寧にその写真もいただいています。私がストラスブールの大聖堂だといって出した写真3の教会はこの教会でした。いいわけになってしまいますが、なにしろ50年も前のことで、私の記憶違い（もともとそんなに明晰な記憶力があるわけでもありませんが）にまちがいありません。先生に送っていただいた写真を載せます（写真1）。



写真1. ストラスブールの聖ポール教会。新潟大学丸井教授が撮られたもの。大聖堂とは形も場所も違う。訂正し、丸井先生に感謝したい。

1. 地元の素材を使った街角や家

この教会も大聖堂と同じように三畳紀前期の赤色砂岩を使っていることに変わりはないと思います。ストラスブールは2000年もの歴史のある古い町ですから、古い教会ができるときに使った素材はその近傍から探したに違いありません。まわりにあったのが三畳紀の赤色砂岩だったわけです。町の中心部は古い部分ですからこのあたりを歩くとストラスブールは赤い町だなあということになります。

タイのスコタイの町も古い町ですから、その町がまわりでとれる赤い砂岩でできていても不思議ではありませんが、規模としてはずっと小さく、廃墟を中心にした部分が赤い印象を与えます。もっとも、タイのメナム流域は強いラテライト風化を受けているところで、1960年代に私たちが調査をしていたころには、幹線道路も舗装してなくて赤いラテライト土壌を平らにした道路でしたからそこら中真っ赤で、なにも石材の色を考えるまでもなく世の中が真っ赤な感じでした。窓が開いた車で走ると赤い砂埃が舞い上がって頭が

真っ赤になったものです。バンコックにあったトヨタの支店でランドクルーザーを1台貸してもらって、それで走ったら後ろの扉（空いている）から赤い埃が舞い込んで1日の終わりに同じパーティの人たちに西洋人になったみたいだと言われたのを思い出します。頭だけでなく着ているものがすべて赤くなって、往生しました。もっとも今では赤い髪をした人は日本国内にいくらでもいます。

それでもスコタイは一応一つの町でしたが、建物の単位になるとご当地の石でできているところは無数にあって、例を挙げるときりがありません。私があちこち訪問した先で見たもののうちいくつか特徴的だと思ったものをとりあげてみます。

シシリー島の熔岩でできたローマ時代の円形劇場

第一はイタリアのシシリー島のエトナ山由来の火山岩でできた円形劇場遺跡です。シシリー島は北側のパレルモとかメッシーナとかが有名ですが、エトナ山の山麓で東側のイオニア海に面したところにカターニアCataniaという町があります。町全体がエトナ山の山麓斜面の上であって、海に向かってゆるやかに傾いた町です。その中に真っ黒な熔岩でできた円形劇場が遺跡として保存されています。Anfiteatro Romano (Roman Amphitheatre)と呼ばれています。ローマ時代にはこのような黒い石が町の建設に使われていたことを示しています。このほかにもエトナ山の熔岩が建物の一部に使われているのをあちこちで見ました。もしこれが町全体の建物に使われていたら、カターニアの都市の色は真っ黒ということになったでしょう。実際ローマ時代にはそういう部分もあったのかもしれませんが、もちろん今のカターニアは大理石もコンクリートも使われていますから、町の色が黒ということはありません。ごく普通の色をもつ都市です。

エトナ火山の名前は地学に関係した人でなくてもよく知られた名前です。正真正銘の活火山で、私は2000年

に地元のカターニア大学の人の案内で山腹を車で上れるところまで連れていってもらいましたが、ついこの前の噴火の時家のすぐ後ろまで熔岩がやってきてマリア様に祈ってようやく庭先で止まったので、噴火後家の前にマリア様の像をたてた、なんていう家も見せてもらいました。海岸にはできたての枕状熔岩が



写真2. シシリー島カターニアのローマ時代遺跡Anfiteatro Romano. 黒いエトナ火山の熔岩が使われている。

ると積み重なっているのが見られるところもありました。帰りの飛行場でエトナ山の噴煙を写真にとってきましたが、日本に帰ってからすぐ噴火したというニュースがあり、私たちが行った5合目くらいの茶店も熔岩に飲み込まれたようでした。

暗灰色のスレートを貼った家

黒か濃い灰色の素材を使った建物というと北上南部の雄勝のスレートを思い出します。これを全面に貼り付けた家が実際あって屋根だけでなく、壁もこうして雨風に耐えるようにしたものもありました（写真3）。西洋の城館などにこういうのがあるのを見たことがあります。日本では珍しいかもしれませんが、もっとも村全体がそのようになっていたわけではないので、都市の色とはいえないでしょうが、近くでとれる素材を使った建築という点ではうってつけの例です。

雄勝のスレートというのは地質の人ならたいてい知っている北上山地南部にある二畳紀の無化石な黒色粘板岩です。登米層と呼ばれていますが、スレート劈開がよく発達していて、ハンマーでたたくと劈開の方向に割れます。これを利用して天然スレートが切り出されていますが、小判型の片方を切り落とした形に整形されたものが屋根や壁を葺くのに使われます。北上南部のリヤス式海岸のなかに雄勝湾という深い湾入があって、その北岸に大規模な石切場が見ら



写真3. 雄勝のスレートを壁に貼った家。地元の素材を使った例。



写真4. 雄勝のスレート石切場。雄勝湾の南岸から北岸を眺めたところ。

れます（写真4）。質のいいところは硯石にも使われていて、雄勝には硯を売っている店が何軒もあります。

石灰岩の上に立てられた城

白か灰色の石灰岩でできた都市はヨーロッパにはいくらでもあります。しかし建物が建っている基礎の岩石をそのまま使ったものがあるのを思い出したので紹介します。フランス南部、リヨンの少し南にヴァランスValenceという町がありますが、その町の西側にクリュッソル山Montagne de Crussolという丘があって、その頂上に古い城の廃墟があります（写真5）。壁や基礎の一部はまだ残っていて、往時をしのばせるに十分です。この



写真5. 南仏Valenceの近くのCrussol山上にたてられた城の廃墟。丘そのものも、城もジュラ系最上部のTithonianの石灰岩でできている。これと同じ角度の写真が有名なW.J.ArkellさんのJurassic Geology of the Worldという大著にもものっている。

山はジュラ系を調べる人には有名な山で、ジュラ系の上部が整然と積み重なっていて層序をたてるのに絶好です。クリュッソル階Crussolianという階をたてた人もいますが、あまり使う人はありませんでした。私もアルプス山脈の帰りに寄り道して見に行ったことがあります。ここはちょうどヨルダンのペトラが赤い砂岩に都市を彫り込んでつくったマイナスの建築であるのとは逆に、基礎の岩石を切り出して積み重ねたプラスの建築です。城をつくる石材や基盤になっている山の地層からはアンモナイトがざくざく（といった感じになるほど）出ます。そのいくつかを写真6に示しました。わづか数時間ざっと見学したくらいでこの2倍も3倍ものアンモナイトが採れるのですから羨ましいかぎりです。しかもその保存のよさといったら！

海風にうたれた日本海岸の木造家屋

石材のように自分の色は外にださないけれど，家をたてるのに使われた木材も時間の経過を示すそれ相応の色調を見せます．木を使った家はその土地の風景の中にじっくり落ち着いています．出雲崎という小さい町が越後の日本海岸にあります，知る人ぞ知る，良寛さんで有名でもあるし，石油産業発祥の地でも知られています．冬は日本海の荒波がしぶきとともに吹き付けてきて，ひどいときは外に



写真6. Montagne de Crussol のジュラ系上部石灰岩から出るアンモナイトの例．ちょっと立ち寄っただけでこの3-4倍の量をとった．保存が極めてよく，ここのアンモナイトをまとめたモノグラフが19世紀にはできている．

でもできませんが，そういう所で時を経た木の家はなんともいえない渋い色になります（写真7）．この色は日本海沿岸に独特というわけではなくて同じような気候条件だと同じようなことが起きるのでしょうが，こういう村の長年の風雪に耐えた材木の色は，日本の古い村落の原風景をつくりだしているようにみえます．私の生家も出雲崎からそんなに遠くない日本海側ですが，山の中なので風はそんなに強くありません．しかし雪に閉ざされた長い冬の過酷さは骨身にしみて知っているつもりです．海辺ではさらに風がそれに加わるのですから，その苛酷さは筆舌につくしがたいことでしょう．木材が出す色は素材そのものの色ではなくても，これはやはり都市の色（あるいは村落の色）というべきであると思っています．冬，上越線にのって関東から越後側に入ると，風景がこの色調に変わります．雪の白さの中にたたずむ薄墨色かもっとくすんだ独特の色の村を



写真7. 越後出雲崎の木材の家（昭和57年）．長年の風雪によって薄墨色の独特な色調をもっている．日本海沿岸の古い村落の原風景．

見ると、ああ家に帰ってきたなあという感慨をもちます。

そういっても、このごろは新建材で立て直す家が多くなり、この色調はだんだん見られなくなりました。写真7の家も今でもこのままでいるかどうか知りません。写真は今から30年近くも前の写真ですからたぶんもう新しくされたでしょう。新しい建材は風化には強いけれどもこういう風合いを醸し出すことはありません。だめだといっているわけではなく、時代が変わったという古い人間の感慨だけです。

2. 塗料がかもしだす都市の色

白い町

建物を造るのは人間なので、これまでいろいろあげつらってきた都市の色は人間がつくりだした色調には違いありません。しかしこれまで挙げてきたものは、都市あるいは家をつくっている素材の色が都市の色を決めているという例でした。ところが、人間はつくった家に色を塗ります。たとえば地中海沿岸地方には町中まるまる真っ白に塗った町がいくつもあって、「白い町」でインターネットを検索すると、いくつもそういう町の記事が出てきます。スペイン南部アンダルシア地方の太陽海岸 Costa del Sol とか、イタリア南部のアドリア海沿岸部とか、あるいは北アフリカのモロッコとか、白い町は観光スポットになっているらしくて、そういう町への観光旅行の勧誘や旅行記が目白押しに並んでいます。そういうのにでている写真をちらちら見ると、白い町はほんとうに真っ白で、都市の色一白の巻はこういうところをいうのだということになります。この白は建物の材料本来の色でなくて、白い塗料を塗ってあることは明白です。どういう塗料を塗ってあるのか、実際に見ていないので説明できません。このシリーズでは、実際に私が見たものを紹介するように心がけていますので、そういうところに行ったことがないもので写真も掲げることができません。たぶん、白い町はテレビなどでも見せることがありますから、ご存知の方も多いでしょうから

ご容赦ねがいます。実をいうと、コートダジュールのニースとかカンヌとかは通ったことがあって、白い家が多いという感じはもっていたのですが、あまり興味を持たなかったのか、そういう写真は私のアルバムにはありませんでした。天然のものでこのような白に匹敵するものとなるとドーバーの白い壁くらいになるでしょうか。あえてドーバーの白い壁の写真を載せ



写真8. ドーバーの白い壁。ドーバーの町の税関のうしろにある白亜紀
チョークの壁。地中海沿岸の白い町の白い家に匹敵する天然の白。

ます（写真8）。

ストックホルムの黄色い壁

白ではなくて、黄色に塗った壁が目立つのが前にも挙げたことがあるかもしれませんが、ストックホルムの町です。なんどかこの町にはたちより、一度は何日か滞在したこともあります。そのときにこの黄色い色はなんだろうと思った記憶があります。その記憶がおぼろですが、たしか大きな駅（だったと思いますが）に降りたってまわりを見回したときに、黄色の家がやけに目についたような記憶があります。もちろんほかの色の建物もあったのですが、黄色だけが記憶にあるのでよほど印象的だったのでしょうか。写真がなかったか探すのですが、これがまた出てきません。ストックホルムではありませんが、少し南に下がったところにあるリンシェピンLinköpingという中都市で開かれた会議に出席したことがあって、その

時とった写真の中に黄色い壁の家がありました（写真9）。この色はスエーデンの人は好きな色らしくて、ときどきこの色の家を見ました。この黄色はペンキなどにあるきつい黄色ではなくて、なにか自然の材料からとった色なような気がします。町の雰囲気とよくとけあっていて、スエーデンの特徴になっている雰囲気があります。そういえば国旗が青と黄です。まさかそれと関係はないのでしょうか、黄色というと私はついスエーデンを思い出します。



写真9. スエーデン、リンシェピン市の黄色い壁の家。前景は氷河の削痕のついた羊背岩。

3. 自然と同化した都市の色

砂漠の色と同化した村

写真10はチベット南部の田舎の村です。カンマール・シャンKangmar Xian近くの村ですが、名前を忘れました。北京で開かれた第30回IGCのあとの巡検で訪れた村です。ラサから南下してシッキムにいたる道路（行けるのかどうか知りませんが）の途中でヒマラヤ北帯（と中国の地質屋さんと呼んでいました）の基盤をつくる変成岩を見に行ったときの見

学地点です。地質とは関係のない写真ですが、後ろに見える地層と同じ色調になっています。写真では塀で囲まれた家（たぶん僧院だったもの）のまわりは耕されて緑地になっていますが、それ以外は荒涼とっていい砂と岩の世界です。この中に建てられている家はそこで手に入る石材を使っているのだから、背景の地層と同じ色調になるのは当然です。一部をみただけで断定的なことはいえませんが、チベットという場所の基本的な色調がこの淡い褐色のような気がします。ラサといった大きな都会も例外ではありません。



写真10. チベットラサからシッキムに抜ける道の途中のKanmar Xian近くの村落。家のまわりには農作物が植えられていて緑色があるが、そのほかは背景の山の色と同じ。

こんな小さい村でなくても、同じことが起きています。写真11はチベット南部では一つの中心であるシガツェXigazeの町です。大きな僧院があってこの地方の中心の町でもあります。一つ一つの家を見ると、少しずつ違いますが、こうして遠くから眺めると全体として砂色の砂漠色になってしまっています。これはまぎれもなくこの都市の色ですが、これは素材の色ではなくて、自然環境の色とでもいったらいいのでしょうか。チベットで都市の色はと聞かれたら、どの都市でもこの砂漠色だと答えざるをえないでしょう。背景の色調の中にすっぽりはまりこんで、同じ色に同化してしまっています。少し埃っぽくて、手でなでると少しざらざらするというような感覚的な印象も一緒についてきます。



写真11. チベット南部のシガツェXigaze市。個々の家はそれぞれ少しずつ違うが、全体としてみるとまわりの砂漠の色に同化してしまっている。

アンマンの町

もっとずっと大きい町でも、乾燥地帯にある町は似たような色をもつようです。アンマンAmmanはヨルダンの首都で、新石器時代から人が住んでいたという古い古い歴史をもった町です。旧約聖書にもでてくるそうです。町の中心部にはローマ時代の円形劇場が

きれいに残されていますが（写真12），これでさえその古い歴史の中では新しいものかもしれません．現在の町は石やコンクリートの無機質な味気のない町ですが，スークと呼ばれる一郭は古い部分で，それが遠くから見ると砂漠色に統一されて見えます．

ヨルダンや隣のイスラエルを含むこの地域はヨルダン川の谷を除けば大体は植生の乏しい，日本人の目には砂漠と見えるところですが，その色になってしまっています．チベットでも簡単に砂漠に同化してしまったなどと書きましたが，どうしてこういう色調になるのかはちゃんと調べてみないとわかりません．いずれにせよ，太陽と風とそしておそらく大気中に浮遊する微細な堆積物粒子が関わっているだろうと思います．アンマンの町を出ると，すぐ荒涼とした風景に変わります．前に白の巻の冒頭で触れたヨルダン南部のペトラに行くとき，道路の向こうの丘の上をラクダの列が歩



写真12. アンマンのローマ劇場跡.



写真13. アンマン市街. ローマ劇場のすぐそば. 建物は新しいものが多いが全体の色調は砂漠色.

いていて，固定観念として頭にあった砂漠のイメージ（ほんとはずいぶん違うものもあるらしいのですが）と合致して安心（？）したことがあります．アンマンの町はいわばそういう土地の中に生まれ，長い歴史を経て自然の風景の中にとけ込んだ町だといえると思います．これもまた立派な都市の色ではあります．

1970年代の終わりころ，パリ大学に招かれて大学院生に日本の地質の講義をしにでかけたことがあります．安い飛行機を使ったものですから，南まわりでインド・中近東・北アフリカを通る長い飛行機の旅になりました．カルカッタとかドバイとかを過ぎるころには，やはり長途の旅で草臥れていましたが，カイロに近づくころに窓から見える風景が真っ黄色になっているのに驚きました．砂漠の色でした．古い記憶ですから正確がどうかわかりませんが，エジプトの砂漠はヨルダンやナミビアの砂漠とは色が違うのかもしれませんが．カイロでは飛行場から外にでませんでしたので，北アフリカのサハラ砂漠の色は実は知らないのです．年取ってもうチャンスはないでしょうが，サハラは一度みたいところ

ですし、その中の都市のいくつかは訪れてみたいところです。きっと私の知らない都市の色があることでしょう。

4. カラフルな都市

さらに人工的なカラフルな都市の色

まわりの自然と同化した都市の色をいろいろあげてきました。まだ例はたくさんあってきりがありませんが、話は同工異曲になりますのでもうそろそろやめます。最後に、これまでと全く逆の方向へ行った人工的な都市の色(?)を紹介します。

氷におおわれた土地は少なくとも氷に覆われる時期には人影は少なくなります。そういうところにも人は住み着いていて、大小をとわなければ都市ができます。北極海にあるスバルバルドSvalbard(正確な発音はいつものことながらむづかしい。スバルバールと書いてある本もあります)は北緯80度という北にあります。今はノルウエー領になっていますが、もとは人がほとんど居なかったのでしょう。オランダのバレンツという探検家が1596年に発見したことになっていて、彼はこの島をスピッツベルゲンSpitzbergenと呼びました。海からみてとがった峰が目立ったのでそういう名前をつけたのだそうです。私たち旧世代はこの名前の方に親しみがありません。19世紀の終わり頃、この島の基盤を覆う古第三系から石炭が発見されて、炭坑が開かれました。アメリカ人のロングイヤーLongyearが炭坑の町を開き、それがもとで現在のロングイヤービンLongyearbyenの町ができあがりました。スバルバルトの首都(?)ですが、人口わづかに1600人、それでも島全体の人口3000人の半分以上を占めます。トナカイが悠々と町の真ん中で氷の下の草を喰み、白熊がしょっちゅう出没するのだそうです。私が訪れたのは1月の冬の真っ最中でしたが、気温0度、今日はあたたかい日だということでした。それでも町は雪に埋もれ、空気も薄墨色でした(写真14)。こういうところでは、人間は鮮やかな色にあこがれるのでしょうか、町の建物は原色

の明るい色で塗り分けられていました。写真15は私が撮ったのではなく、きれいな写真の本から借用しました。たぶん夏の陽光の中で撮った



写真14. 冬のロングイヤービン。この日は例外的に暖かい日で、景色もやや明るいのだそうである。例外的でない日になったらどうなるのだろう。

のでしょう。私もこのカラフルな家は見ました。似つかわしくないようでいて、それはそれで暗鬱な景色にぴったりはまった色調でした。これは人間が自然にみせる順応なのかもしれません。統一した色ではありませんが、これはこれで一つの都市の色なのではないかと思い紹介することにしました。

都市の色は古い町並みほど個性的で懐かしみがあるようです。日本でも戦前はそういう町並みがかなりあったように思います。出雲崎のくすんだ家々の写真をとったのは昭和45年ことですが、そのころはまだ自然の色を残していました。最近と同じような新しい建材が日本全国どこにいても使われていて、どこにいても同じような町並みになっています。そうして固有の都市の色は消えてしまいました。そのどこにいても見られる新建材の町並みはそれなりの都市の色をもっていることにはなるのですが、その歴史も自然の背景もみなどこかに行ってしまいました。それがいけないといっているのではなく、それはそれでやむを得ないことではあるのですが、かなり悲しいことは事実です。都市の色などということを考え始めたのはヨーロッパに滞在していたころなので、最初は純粹に美的(?)な観点からでした。それが世界のあちこちを旅するにつれ、行く先の自然、歴史、人生などに関わっていろいろ考えさせられるようになってきました。そして毒にも薬にもならないことを、ときどき立ち止まって考えてみるのも悪くないと思うようになって来たのです。

なお、写真はすべてカラーで、そうでなくては都市の色ではないのですが、深田研ニュースでは白黒です。いつものように原図は深田研のホームページでご覧下さい。



写真15. スバルバルド、ロンダイヤービンの町のカラフルな家々。前列左から赤、ピンク、薄い草色、黄色。